

(仙台)

若林城は、標高一三m程の広瀬川北岸の自然堤防上に位置する平城で、堀と土塁が四方にめぐる大規模なものである。藩主伊達政宗が仙台城の繩張りを行なつてから一七年後、屋敷新築の願いを幕府より許可され、寛永四年（一六二七）に造営が始まった。しかし、その存続期間は造営から政宗死去に伴う解体まで約一〇〇年という短いものであった。城廃絶後は「御薬園」など

年)

(渡部弘美)

宮城・若林城跡

わかばやしじょう

- 1 所在地 宮城県仙台市若林区古城二丁目
- 2 調査期間 第二次調査 一九九九年（平11）八月～一〇月
- 3 発掘機関 仙台市教育委員会
- 4 調査担当者 渡部弘美・伊東真文
- 5 遺跡の種類 古墳・集落跡・城館跡
- 6 遺跡の年代 古墳時代中期・平安時代・江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

に使用されていたことが知られる。なお、城館下層面より円墳や平安時代の住居跡が検出されている。

今回の調査区は、北辺堀跡の西側にあたる。堀跡は昭和一〇年代以降の造成などにより盛土で厚く覆われていたが、下層から土器や陶器とともに多量の木製品が出土した。木製品には下駄・桶や樽の側板・傘の轆轤・ヘギ板・端材があり、木簡二点もこれらの木製品とともに出土している。遺物群は堀外からの一括廃棄物と判断され、共伴する陶器類から一九世紀のものと考えられる。

8 木簡の釦文・内容

(1)

「

X

匁

近

江

屋

」

[

か

]

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

〔

か

〕

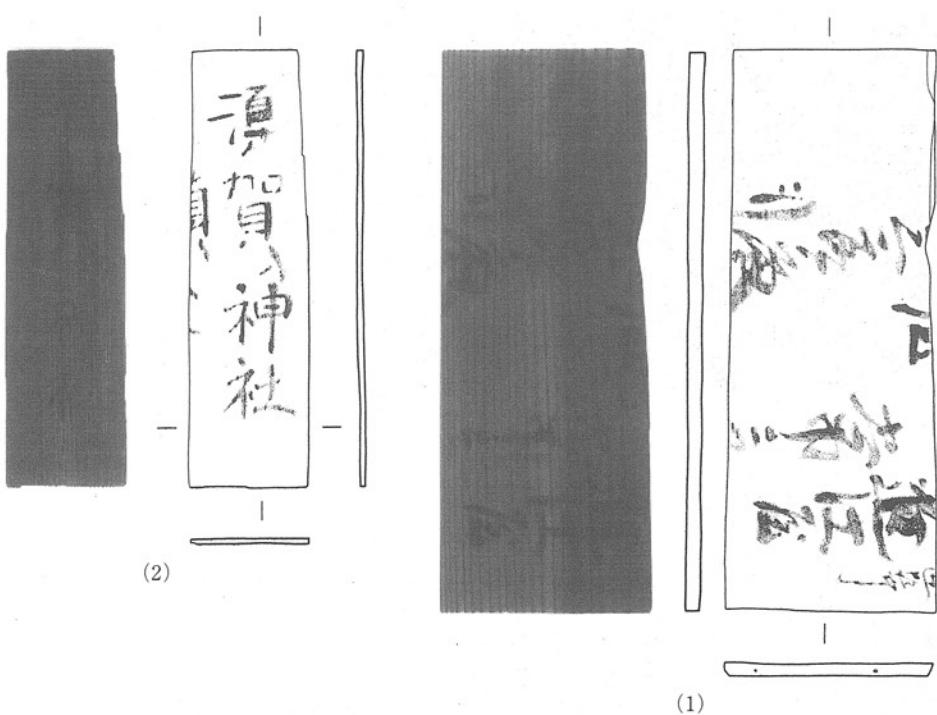
〔

か

〕

〔

か



ローマ木簡研究者実見記

先日、オックスフォード大学のローマ木簡研究者の方々が奈良文化財研究所に来訪され、日本の木簡をお見せした。日英両国の木簡研究者間のコミュニケーションは、大阪大学の栗原麻子先生が確保してくださった。

彼らが対象としている、イギリス出土のローマ木簡は、木板に直接インクで文字を書くタイプである。板をつなげ、長い文書を書くこともある。

どういう用途なのか、何が書いてあるのか、という様なやりとりから始まり、出土地点の情報記録法、出土状況と内容の分析、といった「木簡マニア」の領域に話題が及び、ついに、木片はどのように加工するのか、文字がにじまないコーティングなどはないのか、といった話題に及んだとき、日英の意思伝達は現物を指しながらの身振り手振りが主流となるに至った。むろん、栗原先生に確認しながらではあるが。

文字や言語・時代が異なるついていても、木簡を遺跡から取り上げ、観察し、訛読し、検討し、保存・公開する、という「木簡研究の方法」は共通している、と痛感した次第である。

(馬場 基)